

【②見方や考え方ーB：授業をつくる教師の視点】

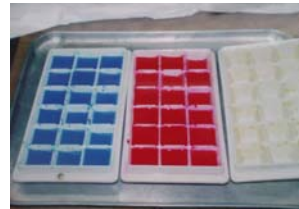
■題材のヒントはすぐそこに

ー猛暑の教室から生まれた「氷の絵の具」ー

私が子どもの頃は、教室にエアコンがなくてもさほど気になりませんでした。しかし、地球温暖化の影響か、夏になると授業もままならないほどの猛暑が続き、エアコンは必需品のようになりました。

エアコンのない図工室、9月といえども残暑は厳しく、汗がぼたりと流れ落ち、汗ばんだ腕に画用紙が張り付くなんてことも多々ありました。猛暑の中、子どもたちが健気に絵を描く姿をみていると、この暑さを和らげる改善策はないだろうかと考えずにはられません。そのとき「氷で描く！」とひらめきました。

まず、製氷皿に絵の具を溶いた色水を入れ、冷凍庫で1日冷やします。翌日、製氷皿を取り出すと…、なんと、白い冷気を帯びた氷の色付きキューブが完成したのです！



3年生の授業で、この「氷の絵の具」を実践してみました。紙は吸水性のある版画和紙を用意しました。「あんまり暑いので絵の具を凍らせてみたよ。」

そんな導入のひと言に子どもたちはもう興奮状態です。製氷皿を図工室に持ち込むと、子どもたちが即座に集まってきました。

初めて実践した年は、「アイスランドの不思議な動物」という主題で描くように指導してみましたが、氷からのイメージで、ペンギンを描く子がたくさんいました。そこで、翌年からはペンギンをテーマにし、発想の手立てとしました。

「親子ペンギン」「カラフルペンギン」、また、汗をかきながら「寒がりペンギン」を描いている子もいました。「早く描かないと溶けちゃうよ！」しばし、猛暑も忘れ、楽しい授業となりました。



それから数年、地域のすべての学校にエアコンが設置され、この実践はしばらくお休みをしていますが、題材のヒントは、こうした日常の些細な願いや思いからも生まれてくるものです。流動的なこの世の中において、常にアンテナを張っておくことが大切だと考えます。

ひらた こうすけ
(平田耕介：東京都墨田区立押上小学校教諭)